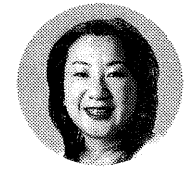
（第3種郵便物認可）　毎日新聞　オピニ

新聞時評



文化活動団体
「熟塾」代表
原田　彰子

小泉首相の靖国参拝、真意追求を

「靖国神社参拝問題」が再燃した。5月17日朝刊5面〈首相　封印解く〉で、衆院予算委員会での小泉純一郎首相の答弁内容が紹介された。「戦没者に対する追悼の仕方に他国が干渉すべきではない」「追悼の誠をささげるのがなぜいけないのか、私は理解できない」と。この発言の初報は16日夕刊7面〈靖国参拝継続へ意欲〉で3段見出しの扱いだった。17日朝刊はその詳報記事だったが、一連の首相発言は、1面などでもっと大きく取り上げるべきではなかったか。

かくして約1週間後、呉儀・中国副首相が、小泉首相との会談を急にキャンセルして帰国した。理由が小泉首相の「靖国」発言だったことは、25日朝刊1面トップで報じられた。同じ1面の解説〈参拝継続に「最後通告」〉の中で、「会いたくなければ、会わなくてもいい」「野党の審議拒否が伝染したのかな」との首相発言が掲載された。

被害国の「痛み」

「被害国の国民の気持ちが理解できないのか」（孔泉・中国外務省報道局長）。同じ日の朝刊2面、北京特派員らの記事からは、中国側の空気を感じることが出来た。いつもの〝小泉語〟は、「痛み」を感じている中国にとって無神経な言葉としか映っていない。

さらに28日朝刊3面の岩見隆夫氏の〈近聞遠見〉は「8月15日さえはずせばすむ、と思い込み、4年連続して参拝を繰り返したようだ」と指摘した。「日本外交の情報収集力の薄さ」という問題の所在も、垣間見ることができた。

一方、政治的な視野だけでなく、27日夕刊11面〈敗戦で体得した「負けるは勝ち」／〝靖国〟取り下げ平和を〉では、詩人・杉山平一氏の寄稿を掲載し、多角的にこの問題を取り上げていることは評価したい。言葉にも表れる日本人の「へり下り」の深層心理を紹介して相手を立てることの大切さに触れ、「小さな靖国を取り下げて大きな平和を取るなど、資源の乏しいわが国は目に見えない技術などの大きな平和を以て勝負すべきであるまいか」とした91歳の詩人の大局的な提案に、同感することしきりだった。

国民の理解必要

また、30日朝刊11面「よくわかるページ」では、新潟市の9歳の女の子からの「日本と中国の関係がよくわかりません。どうして日本を悪く言うのでしょう？」という質問に、森嶋幹夫論説委員が分かりやすく答えていた。「同じアジアの国として仲良くしていくためには、政治指導者だけでなく、わたしたち国民も互いの国を理解する努力をすることが必要」と締めくくられていた。

「前事不忘後事之師（前の経験を忘れなければ、後の教訓となる）」。10年ほど前、私が中国の「南京大虐殺記念館」を訪れた際、遺骨陳列室に大きく掲げられていた言葉だ。「戦争の悲劇を繰り返さないため、過去を見つめ、そして忘れないで」と、積み上げられた無数の遺骨は声無き声を上げて鮮烈に訴える。館内には、日本兵の残虐行為の写真が展示されていた。

過去を乗り越え、民族、文化、国情など違いを超えて、1972年の日中国交正常化以来、積み上げてきた信頼や友情。政治の面から大きなひびが入ることになれば、文化や経済にもその亀裂が広がっていく可能性は高い。日本の国民はもちろん、中国やアジアの国民も納得できるよう、小泉首相が靖国参拝に込めている「歴史認識」の真意を追求してもらいたい。

◇

この論評は大阪本社発行の紙面をもとにしました。